

## シェーンベルク《弦楽四重奏第三番》作品30の分析

——その音響的側面を中心に——

浅井 佑太

この論文では、十二音技法によるソナタ形式としては初期の作品の一つであるシェーンベルクの《弦楽四重奏第三番》作品30、第一楽章の分析を行う。この作品はこれまで繰り返し分析の対象となってきた。しかしその際、音列の使用法や動機労作のみが問題とされ、その音響組織については十分に考察されてはこなかった。それゆえ本稿では、音列技法と音響組織の間関係を明らかにし、音列技法がソナタ形式の各区分を音響的に差異付ける役割を果たすことを示す。

本稿ではまず、創作の際に残されたスケッチから理解されるように、この作品では例外的に十二音列の起草が楽節の作曲に先立っていたことが示される。さらに音列表の中で、この音列は5+2+5へと作曲の前に分割され、そのうちの前半5音は調的要素を含むのだが、非調的な後半の7音はそれを中立化する。そしてこのように分割された音列の扱いが、この作品内の各区分の音響的差異付けの際に大きな役割を果たすことになるのである。例えば前半の5音によって形成されることで、主要主題は安定的な性質を帯びる。一方で副主題は、音列が新たに6+6音へと分割され、調的要素が取り除かれることによって、本質的に非調的な性質を獲得する。さらに十二音空間の凝縮とそれによって可能となった音列の自由な使用は、提示部に比べて展開部をより不協和に設計することを可能とする。このように音列技法は形式形成の際にも一定の役割を果たしており、この意味で十二音技法は形式形成に寄与するものと評価することができるだろう。